

特集にあたって

福田正人

精神疾患患者にとって最大の関心は、「いつ頃に」「どのくらい」回復できるか? という見通しだろう。後者の改善の程度は予後というキーワードで臨床や研究のテーマに取り上げられるが、前者の時間経過の見通しは臨床家の経験に委ねられることが多い。回復の時間経過の見通しは当事者に安心と希望をもたらす、生活と人生についての心構えを可能にする。

医療におけるクリニカルパスは、標準化された治療の内容を患者と共有できるツールという役割に加えて、それを時間軸に沿って示すことで見通しを提供できることが有用性のポイントである。このクリニカルパスが精神医療で普及しにくいのは、「時間軸に沿った回復の見通し」の提供が精神疾患については難しいためである。

回復の時間経過という時、医療者には「病気」の経過としての症状がまず思い浮かぶ。しかし患者にとっては、それとともに「生活」の時間経過も関心事である。うつ病で摂れなくなった食事がいつ頃に美味しく食べられるようになるか(日常生活動作:ADL)、統合失調症で苦手になった買い物が順調にできるようになるのはいつ頃か(手段的日常生活動作:IADL)、という見通しである。

そこで、さまざまな疾患や治療について「病気」の回復と「生活」の回復の時間経過をまとめていただく特集を企画した。回復の時間経過は、臨床の現場で当事者にも医療者にも役立つという実用性だけでなく、精神機能や脳機能の失調の回復の時間経過という学問的なテーマでもある。失調した機能は、どういう順序でどういう時間スケールであれば回復できるかという、精神機能と脳機能の可塑性の解明である。

「ぜひ読みたいし大切な内容だが、こうしたテーマで原稿を書いてくださる執筆者が見つかるだろうか」というのは、本特集を相談した編集会議での本誌編集委員の一致した声だった。それは杞憂で、それぞれの分野の第一人者の先生方からこれまでにない原稿をお寄せいただくことができた。エビデンスと臨床経験に基づく充実した内容を、読者の明日からの診療に役立てていただけることを期待いたします。

群馬大学大学院医学系研究科神経精神医学(〒371-8511 群馬県前橋市昭和町 3-39-22)